

# 唐古·鍵考古学ミュージアム

## ミュージアムコレクション

Volume 3





ミュージアムの平面図と展示位置

## 目次 *Contents*

### ◆第1室◆ 唐古・鍵の弥生世界

- No.51 人形土製品 ..... (1)
- No.52 アカニシ ..... (2)
- No.53 石戈と木柄 ..... (3)
- No.54 石鏃2種 ..... (4)
- No.55 分割形土製品 ..... (5)
- No.56 女性シャーマンを描いた大壺 ..... (6)
- No.57 左利きの人物が描いた鹿鹿画 ..... (7)
- No.58 横敷の記号を付す土器 ..... (8)
- No.59 龍の記号を付す土器 ..... (9)

### ◆第2室◆ 唐古・鍵の弥生世界

- No.60 大型臼と堅杵 ..... (10)

- No.61 土器を利用した集水施設 ..... (11)
- No.62 牆に転用された細形銅矛 ..... (12)
- No.63 銅鏡2種 ..... (13)
- No.64 送風管と取瓶 ..... (14)
- No.65 鋳造し銅錠 ..... (15)
- No.66 木鉢 ..... (16)
- No.67 機織り具 ..... (17)
- ◆第3室◆ 田原本のあゆみ
- No.68 笠形木製品 ..... (18)
- No.69 家紋のある曲物 ..... (19)
- No.70 江戸時代の箱底セット ..... (20)
- No.71 和鏡 ..... (21)

## 例言 *Explanatory Notes*

1. 本書は、『広報たわらもと』平成21年2月号（No.445）から平成22年3月号（No.458）に掲載した「ミュージアムコレクション」第51回から第64回に、新規遺物解説7編を追加してミュージアムの展示解説書『唐古・鍵考古学ミュージアム ミュージアムコレクション Volume3』として編集したのである。
2. 本書の本文・写真・図等は、当初のものを基本としたが、一部に表現・内容等改めた部分や写真・図の追加・差替えなどをおこない、補訂した。また、展示品解説の順序は、ミュージアムの展示順序に合わせたため、当初のNoとは異なり、「Volume2」の続きのNoとした。
3. 本書の作成に当たっては、大阪府立弥生文化博物館・神戸市立博物館・（財）山口県埋蔵文化財センターの諸機関からご協力を賜った。記して感謝します。
4. 本書は河森一浩・藤田三郎が執筆し、西岡成晃・藤田が編集をおこなった。



さまざまな表現の人形土製品  
(唐古・鍵遺跡 第69・91次調査)

No.51  
人形土製品

弥生の祖靈像

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代後期

調 査：唐古・鍵遺跡 第61次調査

発見年：1996年

大きさ：残存高5cm・幅2.7cm

展示位置：第1室「唐古・鍵ムラの人々」

縄文時代の土偶、弥生時代の人形土製品、古墳時代の人物埴輪など、縄文時代以降、いろいろな材質で人の形が作られました。

特に先史時代の土の造形物は、本来、腐朽してしまう有機質遺物の情報が残されており、髪型や顔立ち、服装などいろいろな点で当時の習俗を知ることができます。しかし、それ以外にも、これら遺物から精神的なことも推察できるのです。弥生時代のものは、大変少なく簡素になりますが、その中でもユニークな小さな土製品を紹介しましょう。

この土製品は、下端が欠失し上半身のみ残存する高さ5cmほどの小型品です。胴部は下端が細くなる円筒状で、おそらく脚の表現はなかったと思われます。また、手も作られていませんから、手足のない土製品だったのでしょうか。ただし、胸にあたる部分は丸く大きく突出しており、その部分は剥落痕跡であることから、

前面に何か特別な物を持っていた可能性があります。

頭部は丸く、胴部から短くくびれて作られています。顔の部分は一段低くし、逆三角形の形にしています。その全体は、斜め上方を向き、少し顎を突き出したように作られています。一見、空を見上げる「モアイ像」にも似たポーズになっています。

目や口はヘラのようなもので刺突、鼻は粘土で少し盛り上げ、鼻孔を表現。側面の耳は丸い小さな粘土粒で盛り上げ、刺突によって耳孔を表しています。誠に微細な表現で、作者のこだわりは見事です。

さて、このような弥生時代の土製品は、特別なもので、「弥生の神」を表していると考えられています。まさに今回の土製品は赤色顔料が塗られた小型の精巧品であり、特別に作られたものでしょう。その通りか彼方を見る目は、魂のある場所を示しているのかもしれません。



アカニシのパープル腺（黄色部分）

No.52

## アカニシ

食料、それとも貝紫の染料？

内陸部に位置する唐古・鍵遺跡ですが、大阪湾をはじめとする海岸部で採取されたと推定されるアカニシやウニ、クジラ、ハモ、エイ、サメ、タイなどの殻や骨が出土しています。これらは主に食料として唐古・鍵遺跡にもたらされたと思われますが、アカニシに関しては別の用途もあり注目されています。

アカニシは内湾の砂泥底に生息する肉食の巻貝で、漁師の間ではカキやアサリを食い荒らす天敵とされています。一般にはあまり知られていませんが、有明海や瀬戸内海、三河湾、東京湾などの地元では食材として流通し、特に刺身は美味とされています。

注目されるのはアカニシやイボニシなどのアキガイ科の巻貝にある鰓下腺（パープル腺）です。この鰓下腺の分泌液が紫色の染料になるのです。佐賀県吉野ヶ里遺跡で出土した絹布片には紫色の痕跡が認められ、染料の候補としてアカニシが挙げられています。貝によ

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第20次調査

発見年：1985年

大きさ：残存長9.4cm・残存幅7.6cm

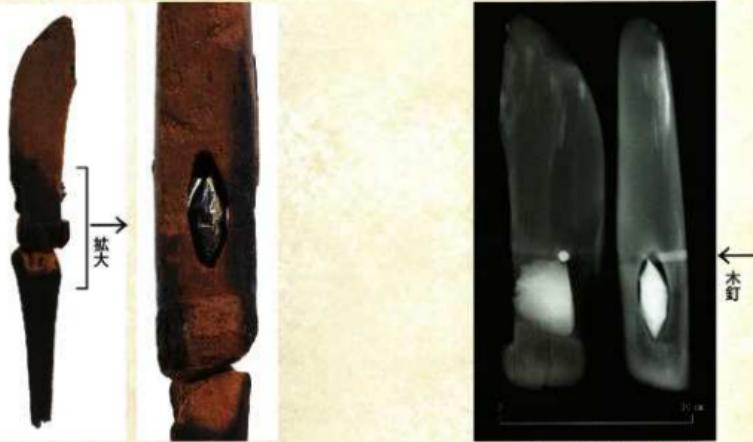
展示位置：第1室「交流と戦い」

る染料（貝紫）<sup>かいじうしき</sup>は古代ローマの例が有名ですが、弥生時代にも同様の技術が存在した可能性があるのです。

さて貝紫の簡単な染色（直接法）はアカニシの貝殻の側面を割り、薄黄緑色を呈した鰓下腺を取り出し、海水を混ぜ刷り潰し染液とし布などに塗りつけます。その後、直射日光（紫外線・酸化）にさらすことによって紫色に変色します。

唐古・鍵遺跡から出土したアカニシも貝殻の側面が壊れており、鰓下腺を取り出した可能性があります。また、井戸からト骨<sup>トガ</sup>などの祭祀遺物と一緒に数個体まとめて出土する例もあり、特別な扱いを受けていたようです。

このように海産物の移動は食料の獲得による海岸部との交流を示すだけでなく、芸術的な目的を動機とするものもありそうです。発掘調査では、ほとんどどの情報が失われていますが、唐古・鍵遺跡の人々の衣装にも赤紫色を再現できるかもしれません。



石戈の装着状態（X線写真）

No.53  
石戈と木柄

## 装着角度がわかる戈

弥生時代の代表的な武器に、「剣」・「矛」・「戈」があります。剣や矛は、馴染みのある言葉ですが、戈はあまり知られていません。戈は、中国・殷代に出現した武器で、長い柄の先端に直交するように装着し振り回して使うもので、おもに青銅で製作されました。その後、朝鮮半島での製作を経て、日本には弥生時代前期末にもたらされ中期初頭には製作が開始されました。青銅の戈のほか、模倣品として石製や鉄製のものもあり、戈は日本では武器より祭祀用として使われました。

さて、今回紹介する石戈は、先端が折れ基部のみが木柄内部に残存したものです。サヌカイト製で、打製によって作られており、とても銅戈の模倣品とは言い難いものです。一方、木柄はヤブツバキ製で丁寧な作りをしています。一部破損していますが、中国のような長い柄ではありません。握り部は細く削りだし、先端は逆し字状に少し削りだしています。この部分の少

## ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第93次調査

発見年：2003年

大きさ：石戈 残存長3.6cm・幅3.8cm

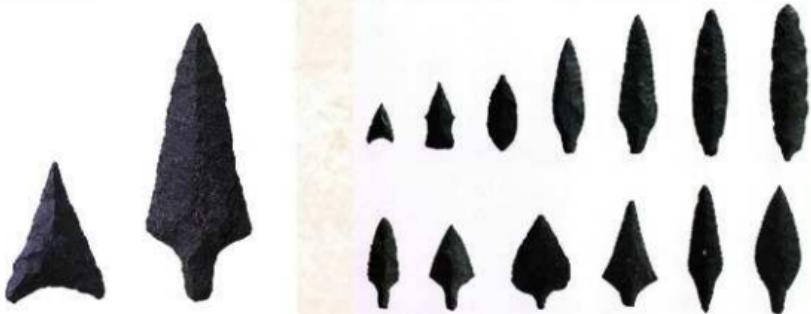
木柄 残存長34.3cm・残存幅5.0cm

展示位置：第1室「交流と戦い」

し下に梢円の孔を穿ち、石戈を装着できるようにしています。注目されるのは、この孔の上端を貫くように径0.6cmの木釘が打ち込まれていることです。この木釘によって、装着された石戈が固定されるように工夫しており、製作者の心遣い技が読み取れます。これによって石戈と木柄の装着角度がほぼ確定でき、75度前後だったとわかります。

もともと中国では、戈と柄の間の角度は、鈍角（上向き）であったのが、日本では上下逆転して戈を装着したため鋭角（下向き）になっています。今回の資料は、打製で実用的なものと推定されますが、その装着角度も日本のあったことは注目できるでしょう。

考古資料の多くは、単品で出土することが多く、本来の使用方法を推定することが困難です。今回の資料は、その意味において、打製石戈の形態を知ることができた貴重な資料になるのです。



さまざまな形態の石鏃  
(唐古・鎌遺跡 第19次調査ほか)

No.54  
石鏃 2種

狩猟具と武器

弓矢の先端に取り付ける鏃はさまざまな素材で作られ、石鏃・骨鏃・木鏃・銅鏃・鉄鏃などと呼び分けられています。縄文から弥生時代には前二者が、弥生から古墳時代には後二者が主に作されました。

近畿地方の弥生時代の石鏃は二上山で産出するサヌカイトを多用し、それを打ち欠き、盛んに作られました。鏃の形態は矢柄との装着方法の違いにより、鏃の基部が内湾する「凹基式」(写真左)と、突起をもつ「有基式」(写真右)に大きく分類することができます。また、大きさや重量も形態に連動し、「凹基式」は小さく軽いですが「有基式」は大きく重くなります。

さて、旧石器時代の狩猟具は槍が主役で、獲物に接近して突いたり投げたりする方法で狩猟をおこなっていました。しかし、縄文時代が始まってしばらく経つと弓の弾性を利用した弓矢が発明され、狩猟技術に大きな変革を與えました。弓矢は射程距離が飛躍的に伸び

◆コレクション・データ◆

時 代 : 左	弥生時代前期
右	弥生時代中期
調 査 : 左	唐古・鎌遺跡 第53次調査
右	唐古・鎌遺跡 第61次調査
発見年 : 左	1993年
右	1996年
大きさ : 左	長さ2.9cm・重さ1.8g
右	長さ5.7cm・重さ5.9g
展示位置 : 左	第1室「弥生の食」
右	第1室「交流と戦い」

るとともに動き回る獲物に対し途中で発射を中止したり的を変更したりすることが可能になり、命中率が高くなったりとされています。さらに槍に比べると多くの矢を携帯でき、狩猟に伴う行動範囲も拡大しました。

稲作が始まった弥生時代でもタンパク源確保のために弓矢によるシカ・イノシシ猟がおこなわれており、その石鏃は「凹基式」の小さな石鏃でした。しかし、弥生時代中期には、西日本を中心に大型の石鏃(写真右)が出現し、狩猟具から対人用の武器として特化しました。これと連動するように、この地域には見張台と考えられる高地性集落が出現するなど、その背景には緊迫した「戦争」の発生があったようです。

このように狩猟具として出現した石鏃も階級社会へと移行する過程で武器へと変質し、また、材質も銅や金属へと進化しました。そこには小さな遺物にみる変化から武器の発達という人類永遠の大きな課題がみえてきます。

## Fundō-gata Doseihin

Stylized Hourglass-shaped Clay Tablet



「笑う顔」の分銅形土製品  
(山口県 明地遺跡)

No.55

## 分銅形土製品

瀬戸内の影響を受けた辟邪のお守り

今回紹介する資料は、分銅のような形をした板状の上製品、「分銅形土製品」と呼ばれるものですが、下半部と上半部の左端が欠損した小さな土製品です。

重さを量る「分銅」に形が似ていることから、この名が付けられていますが、弥生時代に計量器は知られておらず、その用途については、異なる解釈がされています。

この分銅形土製品は、近畿で出土することは稀で、岡山県南部の瀬戸内地域を中心に約700点あまりが出土しています。上半部に眉や目、口を表現した顔のあるものや、縁に沿って彫刻文様を描いたもの、細い棒で刺突したもの、赤色顔料が塗られたものなどさまざまな例がみられます。

これらの大きさは、幅10cmを超える大型品と10cm以下の小型品に分類できることから、前者は頭巾に取り付けてかぶる仮面、後者はバッジやペンダントとして使用されたという説がありますが、確実なことはわ

## ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代

調 査：唐古・鍵遺跡 第48次調査

発見年：1992年

大きさ：残存長6.89cm・厚さ0.86cm

展示位置：第1室「まつりといいのり」

かっていません。

顔が表現されたものは、「笑う」ものが一般的で、古代には「あざ笑う」行為に邪魔を打ち破る意味があったとされています。この「笑う」という表情に注目すると、分銅形土製品の「護符」説は、その可能性を補強することになります。

さて、唐古・鍵遺跡の分銅形土製品の右側縁辺には、6個の小孔があけられており、飾りなどを取り付け、頭をイメージさせたのかもしれません。しかし、顔の表現ではなく、「笑い」が魔除けになるというアイデアは既に忘れられています。この土製品の分布の最東端に位置する唐古・鍵遺跡では、形のみで「お守り」として大切にされたのかもしれません。

このような小さな土製品ですが、そのルーツをたどると遠く西方から招来した「邪魔を避ける」思想が見出せます。



建物・人物・鹿の試大写真

No.56

## 女性シャーマンを 描いた大壺

性別がわかる唯一の絵画

弥生時代の精神生活を考える上で、注目される遺物に土器に描かれた絵画があります。「絵画土器」と呼ばれているもので、その多くは、土器を野焼きする前にヘラで絵画を刻んだものです。したがって、絵画といつても正しくは「線刻画」とするものが多いのです。

さて、今回紹介する絵画土器は、復元すると高さ80cmほどの大壺になり、絵画土器の中では最も大きなものになります。その壺の胸部上半に、並列的に建物・人物・鹿がめぐらされています。絵画土器は破片で出土することが多く、絵画が土器全体にどのような構成で描かれていたかを知る資料はほとんどありません。このことから、今回の資料は絵画の構成がわかる重要な資料となるのです。

絵画は建物を中心としてその左右に人物と鹿を配しているようで、建物と人物が重要な要素であることがわかります。建物は寄棟造りの高床建物で、大棟には

### ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鏡遺跡 第8次調査ほか

発見年：1985年

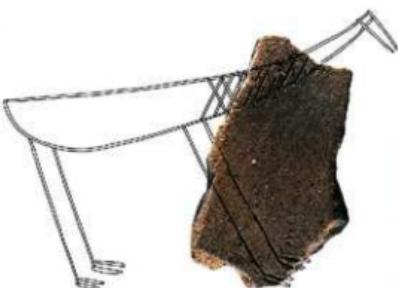
大きさ：復元高80.6cm・復元胸部径54cm

展示位置：第1室「まつりといのり」

大きな渦巻き状の棟飾りがつけられ、床下には手摺りのある梯子がかけられています。建物の右側の人物は、下半身のみしかわかりませんが、袖の一部と女性のシンボルが表現されており、清水風遺跡の絵画土器から、両手を挙げるポーズであったことが推測されます。一方、建物の左側の人物は、両手両足を広げたポーズで左手は鹿の頭を捕まえているように見えます。これら建物と人物の間を埋めるように牡鹿や雌鹿が配されています。

おそらく大型建物の前で女性シャーマンが「魂振り」、すなわち生命の再生を祈っている姿を表現しているのでしょうか。そして、そのまつりの場には、犠牲獣として鹿が供えられていたのではないでしょうか。

今回の絵画土器は、シャーマンの性別を特定できる唯一の資料であるとともに全体を構図からまつりの場を想定できる重要な資料といえましょう。



同じ表現のある鹿絵画  
(唐古・鍵遺跡 第69次調査)

## No.57 左利きの人物が 描いた鹿絵画

神聖視された鹿

弥生時代になると、稲作の伝播に伴い、農耕儀礼も伝えられました。1年が農耕を基本とする生活になり、稲の成長の基礎となる土地に対する観念も変化しました。その中でさまざまな動物が、地靈の象徴となりました。その代表格が鹿です。今回はそのような鹿が描かれた絵画土器片を紹介します。

この土器片は、唐古・鍵考古学ミュージアムの開館にあたって戸田秀典先生（関西外国語大学）より寄贈されたもので昭和30年代に唐古在住の方から譲り受けたといいます。ほとんど傷んでいないことから唐古池内からの採集品の可能性があるでしょう。

12cmほどのかけらですが、湾曲面が少なく復元すると高さ70cmほどの大壺になります。その脇部に鹿が描かれています。絵画は、角と脇部の一部、前脚2本の部分が残っており、右方向を向いた鹿であることがわかります。

### ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 採集品

発見年：1950～1960年代

大きさ：残存長12.9cm・残存幅12.3cm

展示位置：第1室「まつりといのり」

鹿絵画の多くが左向きであることは、唐古・鍵遺跡の調査者である末永雅雄博士が早くから指摘しており、さらに佐原真先生によってそれらは右利きの人物によって描かれた可能性が高いことが明らかにされています。このことは右向きの鹿絵画の描き手は、左利きであることを示しており、唐古・鍵遺跡例もヘラでの刻み方から左利きであることがわかります。この鹿絵画で特徴的なところは、前脚先の表現です。多くの鹿の脚先の表現は、少し跳ねる程度ですが、本例は脚先が二股に分かれており、偶蹄類の足先を写実的に表現しています。

弥生時代の絵画の中では鹿絵画が最も多く描かれていますが、その中でも今回の資料は、数少ない左利きの人物が描いた写実的な一例といえるでしょう。鹿は弥生の人たちにとって、農耕儀礼に伴う重要な動物として土器に描き続けられていたのです。



No.58

## 複数の記号を付す土器

水のマツリに使われた長頸壺

弥生時代後期、奈良県や大阪府を中心に弥生土器の表面に単純な記号を付するものが多く出現します。

記号は、ヘラで描いたもの（直線）や直径1cmほどの竹管状の工具を押し付けたもの（円形）、赤色顔料や粘土紐で表現したものなど、さまざまな方法で土器に付けられています。

これらの記号を集成してみると、「—、=、≡、|、||、○、U、△、↑、V、×…」などバラエティーに富みますが、それらは規則的でさらに組み合ったり、並列的に記されたりしており、記号としての体系が整っていることがわかります。

このようしたことから、森浩一氏（同志社大学名誉教授）は、中国から日本に漢字が伝わらなかつたら、このような記号が文字として成立したかもしれないと指摘しています。

一方、春成秀爾氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）は、弥生時代中期に盛行する絵画土器と記号が連続する関係にあることから、絵画が省略されて記号が成立

直線	A	A <sub>1</sub>   A <sub>2</sub>    A <sub>3</sub>	A <sub>4</sub> ≡ A <sub>5</sub>	A <sub>6</sub> ≡ A <sub>7</sub>	A <sub>8</sub> ≡ A <sub>9</sub>
	A'	A <sub>1</sub> — A <sub>2</sub> = A <sub>3</sub> ≡ A <sub>4</sub> ≡ A <sub>5</sub> ≡ A <sub>6</sub> ≡ A <sub>7</sub>	A <sub>8</sub> ≡ A <sub>9</sub>	A <sub>10</sub> ≡ A <sub>11</sub>	A <sub>12</sub> ≡ A <sub>13</sub>
曲線	A'	A <sub>1</sub> +	A <sub>2</sub>	A <sub>3</sub> // A <sub>4</sub> // A <sub>5</sub> // A <sub>6</sub> // A <sub>7</sub>	A <sub>8</sub> // A <sub>9</sub>
	B	B <sub>1</sub> X B <sub>2</sub> X B <sub>3</sub> X B <sub>4</sub> X B <sub>5</sub> X B <sub>6</sub> X B <sub>7</sub>	B <sub>8</sub> X B <sub>9</sub>	B <sub>10</sub> X B <sub>11</sub>	B <sub>12</sub> X B <sub>13</sub>
曲線	C	C <sub>1</sub> ⌈ C <sub>2</sub> ⌈ C <sub>3</sub> ⌈ C <sub>4</sub>	C <sub>5</sub> ⌈ C <sub>6</sub>	C <sub>7</sub> ⌈ C <sub>8</sub>	C <sub>9</sub> ⌈ C <sub>10</sub>
	D	D <sub>1</sub> J D <sub>2</sub> J D <sub>3</sub> J D <sub>4</sub> J D <sub>5</sub> J D <sub>6</sub> J D <sub>7</sub> J D <sub>8</sub> J D <sub>9</sub> J D <sub>10</sub> J D <sub>11</sub> J D <sub>12</sub> J D <sub>13</sub> J D <sub>14</sub> J	D <sub>15</sub> J D <sub>16</sub> J D <sub>17</sub> J D <sub>18</sub> J	D <sub>19</sub> J D <sub>20</sub> J D <sub>21</sub> J D <sub>22</sub> J D <sub>23</sub> J D <sub>24</sub> J	D <sub>25</sub> J D <sub>26</sub> J D <sub>27</sub> J D <sub>28</sub> J D <sub>29</sub> J D <sub>30</sub> J
点	E	E <sub>1</sub> ⌈ E <sub>2</sub> ⌈ E <sub>3</sub>	E <sub>4</sub> ⌈ E <sub>5</sub>	E <sub>6</sub> ⌈ E <sub>7</sub>	E <sub>8</sub> ⌈ E <sub>9</sub>
	F	F <sub>1</sub> / F <sub>2</sub> / F <sub>3</sub> / F <sub>4</sub> / F <sub>5</sub> / F <sub>6</sub> / F <sub>7</sub> / F <sub>8</sub>	F <sub>9</sub> / F <sub>10</sub> / F <sub>11</sub> / F <sub>12</sub> / F <sub>13</sub> / F <sub>14</sub> / F <sub>15</sub> / F <sub>16</sub>	F <sub>17</sub> / F <sub>18</sub> / F <sub>19</sub> / F <sub>20</sub> / F <sub>21</sub> / F <sub>22</sub> / F <sub>23</sub> / F <sub>24</sub>	F <sub>25</sub> / F <sub>26</sub> / F <sub>27</sub> / F <sub>28</sub> / F <sub>29</sub> / F <sub>30</sub> / F <sub>31</sub>
点	G	G <sub>1</sub> o G <sub>2</sub> o G <sub>3</sub> o G <sub>4</sub> o G <sub>5</sub> o G <sub>6</sub> o G <sub>7</sub> o G <sub>8</sub> o G <sub>9</sub> o G <sub>10</sub> o G <sub>11</sub> o G <sub>12</sub> o G <sub>13</sub> o G <sub>14</sub> o G <sub>15</sub> o G <sub>16</sub> o G <sub>17</sub> o G <sub>18</sub> o G <sub>19</sub> o G <sub>20</sub> o G <sub>21</sub> o G <sub>22</sub> o G <sub>23</sub> o G <sub>24</sub> o G <sub>25</sub> o G <sub>26</sub> o G <sub>27</sub> o G <sub>28</sub> o G <sub>29</sub> o G <sub>30</sub> o G <sub>31</sub> o G <sub>32</sub> o G <sub>33</sub> o G <sub>34</sub> o G <sub>35</sub> o G <sub>36</sub> o G <sub>37</sub> o G <sub>38</sub> o G <sub>39</sub> o G <sub>40</sub> o G <sub>41</sub> o G <sub>42</sub> o G <sub>43</sub> o G <sub>44</sub> o G <sub>45</sub> o G <sub>46</sub> o G <sub>47</sub> o G <sub>48</sub> o G <sub>49</sub> o G <sub>50</sub> o G <sub>51</sub> o G <sub>52</sub> o G <sub>53</sub> o G <sub>54</sub> o G <sub>55</sub> o G <sub>56</sub> o G <sub>57</sub> o G <sub>58</sub> o G <sub>59</sub> o G <sub>60</sub> o G <sub>61</sub> o G <sub>62</sub> o G <sub>63</sub> o G <sub>64</sub> o G <sub>65</sub> o G <sub>66</sub> o G <sub>67</sub> o G <sub>68</sub> o G <sub>69</sub> o G <sub>70</sub> o G <sub>71</sub> o G <sub>72</sub> o G <sub>73</sub> o G <sub>74</sub> o G <sub>75</sub> o G <sub>76</sub> o G <sub>77</sub> o G <sub>78</sub> o G <sub>79</sub> o G <sub>80</sub> o G <sub>81</sub> o G <sub>82</sub> o G <sub>83</sub> o G <sub>84</sub> o G <sub>85</sub> o G <sub>86</sub> o G <sub>87</sub> o G <sub>88</sub> o G <sub>89</sub> o G <sub>90</sub> o G <sub>91</sub> o G <sub>92</sub> o G <sub>93</sub> o G <sub>94</sub> o G <sub>95</sub> o G <sub>96</sub> o G <sub>97</sub> o G <sub>98</sub> o G <sub>99</sub> o G <sub>100</sub> o G <sub>101</sub> o G <sub>102</sub> o G <sub>103</sub> o G <sub>104</sub> o G <sub>105</sub> o G <sub>106</sub> o G <sub>107</sub> o G <sub>108</sub> o G <sub>109</sub> o G <sub>110</sub> o G <sub>111</sub> o G <sub>112</sub> o G <sub>113</sub> o G <sub>114</sub> o G <sub>115</sub> o G <sub>116</sub> o G <sub>117</sub> o G <sub>118</sub> o G <sub>119</sub> o G <sub>120</sub> o G <sub>121</sub> o G <sub>122</sub> o G <sub>123</sub> o G <sub>124</sub> o G <sub>125</sub> o G <sub>126</sub> o G <sub>127</sub> o G <sub>128</sub> o G <sub>129</sub> o G <sub>130</sub> o G <sub>131</sub> o G <sub>132</sub> o G <sub>133</sub> o G <sub>134</sub> o G <sub>135</sub> o G <sub>136</sub> o G <sub>137</sub> o G <sub>138</sub> o G <sub>139</sub> o G <sub>140</sub> o G <sub>141</sub> o G <sub>142</sub> o G <sub>143</sub> o G <sub>144</sub> o G <sub>145</sub> o G <sub>146</sub> o G <sub>147</sub> o G <sub>148</sub> o G <sub>149</sub> o G <sub>150</sub> o G <sub>151</sub> o G <sub>152</sub> o G <sub>153</sub> o G <sub>154</sub> o G <sub>155</sub> o G <sub>156</sub> o G <sub>157</sub> o G <sub>158</sub> o G <sub>159</sub> o G <sub>160</sub> o G <sub>161</sub> o G <sub>162</sub> o G <sub>163</sub> o G <sub>164</sub> o G <sub>165</sub> o G <sub>166</sub> o G <sub>167</sub> o G <sub>168</sub> o G <sub>169</sub> o G <sub>170</sub> o G <sub>171</sub> o G <sub>172</sub> o G <sub>173</sub> o G <sub>174</sub> o G <sub>175</sub> o G <sub>176</sub> o G <sub>177</sub> o G <sub>178</sub> o G <sub>179</sub> o G <sub>180</sub> o G <sub>181</sub> o G <sub>182</sub> o G <sub>183</sub> o G <sub>184</sub> o G <sub>185</sub> o G <sub>186</sub> o G <sub>187</sub> o G <sub>188</sub> o G <sub>189</sub> o G <sub>190</sub> o G <sub>191</sub> o G <sub>192</sub> o G <sub>193</sub> o G <sub>194</sub> o G <sub>195</sub> o G <sub>196</sub> o G <sub>197</sub> o G <sub>198</sub> o G <sub>199</sub> o G <sub>200</sub> o G <sub>201</sub> o G <sub>202</sub> o G <sub>203</sub> o G <sub>204</sub> o G <sub>205</sub> o G <sub>206</sub> o G <sub>207</sub> o G <sub>208</sub> o G <sub>209</sub> o G <sub>210</sub> o G <sub>211</sub> o G <sub>212</sub> o G <sub>213</sub> o G <sub>214</sub> o G <sub>215</sub> o G <sub>216</sub> o G <sub>217</sub> o G <sub>218</sub> o G <sub>219</sub> o G <sub>220</sub> o G <sub>221</sub> o G <sub>222</sub> o G <sub>223</sub> o G <sub>224</sub> o G <sub>225</sub> o G <sub>226</sub> o G <sub>227</sub> o G <sub>228</sub> o G <sub>229</sub> o G <sub>230</sub> o G <sub>231</sub> o G <sub>232</sub> o G <sub>233</sub> o G <sub>234</sub> o G <sub>235</sub> o G <sub>236</sub> o G <sub>237</sub> o G <sub>238</sub> o G <sub>239</sub> o G <sub>240</sub> o G <sub>241</sub> o G <sub>242</sub> o G <sub>243</sub> o G <sub>244</sub> o G <sub>245</sub> o G <sub>246</sub> o G <sub>247</sub> o G <sub>248</sub> o G <sub>249</sub> o G <sub>250</sub> o G <sub>251</sub> o G <sub>252</sub> o G <sub>253</sub> o G <sub>254</sub> o G <sub>255</sub> o G <sub>256</sub> o G <sub>257</sub> o G <sub>258</sub> o G <sub>259</sub> o G <sub>260</sub> o G <sub>261</sub> o G <sub>262</sub> o G <sub>263</sub> o G <sub>264</sub> o G <sub>265</sub> o G <sub>266</sub> o G <sub>267</sub> o G <sub>268</sub> o G <sub>269</sub> o G <sub>270</sub> o G <sub>271</sub> o G <sub>272</sub> o G <sub>273</sub> o G <sub>274</sub> o G <sub>275</sub> o G <sub>276</sub> o G <sub>277</sub> o G <sub>278</sub> o G <sub>279</sub> o G <sub>280</sub> o G <sub>281</sub> o G <sub>282</sub> o G <sub>283</sub> o G <sub>284</sub> o G <sub>285</sub> o G <sub>286</sub> o G <sub>287</sub> o G <sub>288</sub> o G <sub>289</sub> o G <sub>290</sub> o G <sub>291</sub> o G <sub>292</sub> o G <sub>293</sub> o G <sub>294</sub> o G <sub>295</sub> o G <sub>296</sub> o G <sub>297</sub> o G <sub>298</sub> o G <sub>299</sub> o G <sub>300</sub> o G <sub>301</sub> o G <sub>302</sub> o G <sub>303</sub> o G <sub>304</sub> o G <sub>305</sub> o G <sub>306</sub> o G <sub>307</sub> o G <sub>308</sub> o G <sub>309</sub> o G <sub>310</sub> o G <sub>311</sub> o G <sub>312</sub> o G <sub>313</sub> o G <sub>314</sub> o G <sub>315</sub> o G <sub>316</sub> o G <sub>317</sub> o G <sub>318</sub> o G <sub>319</sub> o G <sub>320</sub> o G <sub>321</sub> o G <sub>322</sub> o G <sub>323</sub> o G <sub>324</sub> o G <sub>325</sub> o G <sub>326</sub> o G <sub>327</sub> o G <sub>328</sub> o G <sub>329</sub> o G <sub>330</sub> o G <sub>331</sub> o G <sub>332</sub> o G <sub>333</sub> o G <sub>334</sub> o G <sub>335</sub> o G <sub>336</sub> o G <sub>337</sub> o G <sub>338</sub> o G <sub>339</sub> o G <sub>340</sub> o G <sub>341</sub> o G <sub>342</sub> o G <sub>343</sub> o G <sub>344</sub> o G <sub>345</sub> o G <sub>346</sub> o G <sub>347</sub> o G <sub>348</sub> o G <sub>349</sub> o G <sub>350</sub> o G <sub>351</sub> o G <sub>352</sub> o G <sub>353</sub> o G <sub>354</sub> o G <sub>355</sub> o G <sub>356</sub> o G <sub>357</sub> o G <sub>358</sub> o G <sub>359</sub> o G <sub>360</sub> o G <sub>361</sub> o G <sub>362</sub> o G <sub>363</sub> o G <sub>364</sub> o G <sub>365</sub> o G <sub>366</sub> o G <sub>367</sub> o G <sub>368</sub> o G <sub>369</sub> o G <sub>370</sub> o G <sub>371</sub> o G <sub>372</sub> o G <sub>373</sub> o G <sub>374</sub> o G <sub>375</sub> o G <sub>376</sub> o G <sub>377</sub> o G <sub>378</sub> o G <sub>379</sub> o G <sub>380</sub> o G <sub>381</sub> o G <sub>382</sub> o G <sub>383</sub> o G <sub>384</sub> o G <sub>385</sub> o G <sub>386</sub> o G <sub>387</sub> o G <sub>388</sub> o G <sub>389</sub> o G <sub>390</sub> o G <sub>391</sub> o G <sub>392</sub> o G <sub>393</sub> o G <sub>394</sub> o G <sub>395</sub> o G <sub>396</sub> o G <sub>397</sub> o G <sub>398</sub> o G <sub>399</sub> o G <sub>400</sub> o G <sub>401</sub> o G <sub>402</sub> o G <sub>403</sub> o G <sub>404</sub> o G <sub>405</sub> o G <sub>406</sub> o G <sub>407</sub> o G <sub>408</sub> o G <sub>409</sub> o G <sub>410</sub> o G <sub>411</sub> o G <sub>412</sub> o G <sub>413</sub> o G <sub>414</sub> o G <sub>415</sub> o G <sub>416</sub> o G <sub>417</sub> o G <sub>418</sub> o G <sub>419</sub> o G <sub>420</sub> o G <sub>421</sub> o G <sub>422</sub> o G <sub>423</sub> o G <sub>424</sub> o G <sub>425</sub> o G <sub>426</sub> o G <sub>427</sub> o G <sub>428</sub> o G <sub>429</sub> o G <sub>430</sub> o G <sub>431</sub> o G <sub>432</sub> o G <sub>433</sub> o G <sub>434</sub> o G <sub>435</sub> o G <sub>436</sub> o G <sub>437</sub> o G <sub>438</sub> o G <sub>439</sub> o G <sub>440</sub> o G <sub>441</sub> o G <sub>442</sub> o G <sub>443</sub> o G <sub>444</sub> o G <sub>445</sub> o G <sub>446</sub> o G <sub>447</sub> o G <sub>448</sub> o G <sub>449</sub> o G <sub>450</sub> o G <sub>451</sub> o G <sub>452</sub> o G <sub>453</sub> o G <sub>454</sub> o G <sub>455</sub> o G <sub>456</sub> o G <sub>457</sub> o G <sub>458</sub> o G <sub>459</sub> o G <sub>460</sub> o G <sub>461</sub> o G <sub>462</sub> o G <sub>463</sub> o G <sub>464</sub> o G <sub>465</sub> o G <sub>466</sub> o G <sub>467</sub> o G <sub>468</sub> o G <sub>469</sub> o G <sub>470</sub> o G <sub>471</sub> o G <sub>472</sub> o G <sub>473</sub> o G <sub>474</sub> o G <sub>475</sub> o G <sub>476</sub> o G <sub>477</sub> o G <sub>478</sub> o G <sub>479</sub> o G <sub>480</sub> o G <sub>481</sub> o G <sub>482</sub> o G <sub>483</sub> o G <sub>484</sub> o G <sub>485</sub> o G <sub>486</sub> o G <sub>487</sub> o G <sub>488</sub> o G <sub>489</sub> o G <sub>490</sub> o G <sub>491</sub> o G <sub>492</sub> o G <sub>493</sub> o G <sub>494</sub> o G <sub>495</sub> o G <sub>496</sub> o G <sub>497</sub> o G <sub>498</sub> o G <sub>499</sub> o G <sub>500</sub> o G <sub>501</sub> o G <sub>502</sub> o G <sub>503</sub> o G <sub>504</sub> o G <sub>505</sub> o G <sub>506</sub> o G <sub>507</sub> o G <sub>508</sub> o G <sub>509</sub> o G <sub>510</sub> o G <sub>511</sub> o G <sub>512</sub> o G <sub>513</sub> o G <sub>514</sub> o G <sub>515</sub> o G <sub>516</sub> o G <sub>517</sub> o G <sub>518</sub> o G <sub>519</sub> o G <sub>520</sub> o G <sub>521</sub> o G <sub>522</sub> o G <sub>523</sub> o G <sub>524</sub> o G <sub>525</sub> o G <sub>526</sub> o G <sub>527</sub> o G <sub>528</sub> o G <sub>529</sub> o G <sub>530</sub> o G <sub>531</sub> o G <sub>532</sub> o G <sub>533</sub> o G <sub>534</sub> o G <sub>535</sub> o G <sub>536</sub> o G <sub>537</sub> o G <sub>538</sub> o G <sub>539</sub> o G <sub>540</sub> o G <sub>541</sub> o G <sub>542</sub> o G <sub>543</sub> o G <sub>544</sub> o G <sub>545</sub> o G <sub>546</sub> o G <sub>547</sub> o G <sub>548</sub> o G <sub>549</sub> o G <sub>550</sub> o G <sub>551</sub> o G <sub>552</sub> o G <sub>553</sub> o G <sub>554</sub> o G <sub>555</sub> o G <sub>556</sub> o G <sub>557</sub> o G <sub>558</sub> o G <sub>559</sub> o G <sub>560</sub> o G <sub>561</sub> o G <sub>562</sub> o G <sub>563</sub> o G <sub>564</sub> o G <sub>565</sub> o G <sub>566</sub> o G <sub>567</sub> o G <sub>568</sub> o G <sub>569</sub> o G <sub>570</sub> o G <sub>571</sub> o G <sub>572</sub> o G <sub>573</sub> o G <sub>574</sub> o G <sub>575</sub> o G <sub>576</sub> o G <sub>577</sub> o G <sub>578</sub> o G <sub>579</sub> o G <sub>580</sub> o G <sub>581</sub> o G <sub>582</sub> o G <sub>583</sub> o G <sub>584</sub> o G <sub>585</sub> o G <sub>586</sub> o G <sub>587</sub> o G <sub>588</sub> o G <sub>589</sub> o G <sub>590</sub> o G <sub>591</sub> o G <sub>592</sub> o G <sub>593</sub> o G <sub>594</sub> o G <sub>595</sub> o G <sub>596</sub> o G <sub>597</sub> o G <sub>598</sub> o G <sub>599</sub> o G <sub>600</sub> o G <sub>601</sub> o G <sub>602</sub> o G <sub>603</sub> o G <sub>604</sub> o G <sub>605</sub> o G <sub>606</sub> o G <sub>607</sub> o G <sub>608</sub> o G <sub>609</sub> o G <sub>610</sub> o G <sub>611</sub> o G <sub>612</sub> o G <sub>613</sub> o G <sub>614</sub> o G <sub>615</sub> o G <sub>616</sub> o G <sub>617</sub> o G <sub>618</sub> o G <sub>619</sub> o G <sub>620</sub> o G <sub>621</sub> o G <sub>622</sub> o G <sub>623</sub> o G <sub>624</sub> o G <sub>625</sub> o G <sub>626</sub> o G <sub>627</sub> o G <sub>628</sub> o G <sub>629</sub> o G <sub>630</sub> o G <sub>631</sub> o G <sub>632</sub> o G <sub>633</sub> o G <sub>634</sub> o G <sub>635</sub> o G <sub>636</sub> o G <sub>637</sub> o G <sub>638</sub> o G <sub>639</sub> o G <sub>640</sub> o G <sub>641</sub> o G <sub>642</sub> o G <sub>643</sub> o G <sub>644</sub> o G <sub>645</sub> o G <sub>646</sub> o G <sub>647</sub> o G <sub>648</sub> o G <sub>649</sub> o G <sub>650</sub> o G <sub>651</sub> o G <sub>652</sub> o G <sub>653</sub> o G <sub>654</sub> o G <sub>655</sub> o G <sub>656</sub> o G <sub>657</sub> o G <sub>658</sub> o G <sub>659</sub> o G <sub>660</sub> o G <sub>661</sub> o G <sub>662</sub> o G <sub>663</sub> o G <sub>664</sub> o G <sub>665</sub> o G <sub>666</sub> o G <sub>667</sub> o G <sub>668</sub> o G <sub>669</sub> o G <sub>670</sub> o G <sub>671</sub> o G <sub>672</sub> o G <sub>673</sub> o G <sub>674</sub> o G <sub>675</sub> o G <sub>676</sub> o G <sub>677</sub> o G <sub>678</sub> o G <sub>679</sub> o G <sub>680</sub> o G <sub>681</sub> o G <sub>682</sub> o G <sub>683</sub> o G <sub>684</sub> o G <sub>685</sub> o G <sub>686</sub> o G <sub>687</sub> o G <sub>688</sub> o G <sub>689</sub> o G <sub>690</sub> o G <sub>691</sub> o G <sub>692</sub> o G <sub>693</sub> o G <sub>694</sub> o G <sub>695</sub> o G <sub>696</sub> o G <sub>697</sub> o G <sub>698</sub> o G <sub>699</sub> o G <sub>700</sub> o G <sub>701</sub> o G <sub>702</sub> o G <sub>703</sub> o G <sub>704</sub> o G <sub>705</sub> o G <sub>706</sub> o G <sub>707</sub> o G <sub>708</sub> o G <sub>709</sub> o G <sub>710</sub> o G <sub>711</sub> o G <sub>712</sub> o G <sub>713</sub> o G <sub>714</sub> o G <sub>715</sub> o G <sub>716</sub> o G <sub>717</sub> o G <sub>718</sub> o G <sub>719</sub> o G <sub>720</sub> o G <sub>721</sub> o G <sub>722</sub> o G <sub>723</sub> o G <sub>724</sub> o G <sub>725</sub> o G <sub>726</sub> o G <sub>727</sub> o G <sub>728</sub> o G <sub>729</sub> o G <sub>730</sub> o G <sub>731</sub> o G <sub>732</sub> o G <sub>733</sub> o G <sub>734</sub> o G <sub>735</sub> o G <sub>736</sub> o G <sub>737</sub> o G <sub>738</sub> o G <sub>739</sub> o G <sub>740</sub> o G <sub>741</sub> o G <sub>742</sub> o G <sub>743</sub> o G <sub>744</sub> o G <sub>745</sub> o G <sub>746</sub> o G <sub>747</sub> o G <sub>748</sub> o G <sub>749</sub> o G <sub>750</sub> o G <sub>751</sub> o G <sub>752</sub> o G <sub>753</sub> o G <sub>754</sub> o G <sub>755</sub> o G <sub>756</sub> o G <sub>757</sub> o G <sub>758</sub> o G <sub>759</sub> o G <sub>760</sub> o G <sub>761</sub> o G <sub>762</sub> o G <sub>763</sub> o G <sub>764</sub> o G <sub>765</sub> o G <sub>766</sub> o G <sub>767</sub> o G <sub>768</sub> o G <sub>769</sub> o G <sub>770</sub> o G <sub>771</sub> o G <sub>772</sub> o G <sub>773</sub> o G <sub>774</sub> o G <sub>775</sub> o G <sub>776</sub> o G <sub>777</sub> o G <sub>778</sub> o G <sub>779</sub> o G <sub>780</sub> o G <sub>781</sub> o G <sub>782</sub> o G <sub>783</sub> o G <sub>784</sub> o G <sub>785</sub> o G <sub>786</sub> o G <sub>787</sub> o G <sub>788</sub> o G <sub>789</sub> o G <sub>790</sub> o G <sub>791</sub> o G <sub>792</sub> o G <sub>793</sub> o G <sub>794</sub> o G <sub>795</sub> o G <sub>796</sub> o G <sub>797</sub> o G <sub>798</sub> o G <sub>799</sub> o G <sub>800</sub> o G <sub>801</sub> o G <sub>802</sub> o G <sub>803</sub> o G <sub>804</sub> o G <sub>805</sub> o G <sub>806</sub> o G <sub>807</sub> o G <sub>808</sub> o G <sub>809</sub> o G <sub>810</sub> o G <sub>811</sub> o G <sub>812</sub> o G <sub>813</sub> o G <sub>814</sub> o G <sub>815</sub> o G <sub>816</sub> o G <sub>817</sub> o G <sub>818</sub> o G <sub>819</sub> o G <sub>820</sub> o G <sub>821</sub> o G <sub>822</sub> o G <sub>823</sub> o G <sub>824</sub> o G <sub>825</sub> o G <sub>826</sub> o G <sub>827</sub> o G <sub>828</sub> o G <sub>829</sub> o G <sub>830</sub> o G <sub>831</sub> o G <sub>832</sub> o G <sub>833</sub> o G <sub>834</sub> o G <sub>835</sub> o G <sub>836</sub> o G <sub>837</sub> o G <sub>838</sub> o G <sub>839</sub> o G <sub>840</sub> o G <sub>841</sub> o G <sub>842</sub> o G <sub>843</sub> o G <sub>844</sub> o G <sub>845</sub> o G <sub>846</sub> o G <sub>847</sub> o G <sub>848</sub> o G <sub>849</sub> o G <sub>850</sub> o G <sub>851</sub> o G <sub>852</sub> o G <sub>853</sub> o G <sub>854</sub> o G <sub>855</sub> o G <sub>856</sub> o G <sub>857</sub> o G <sub>858</sub> o G <sub>859</sub> o G <sub>860</sub> o G <sub>861</sub> o G <sub>862</sub> o G <sub>863</sub> o G <sub>864</sub> o G <sub>865</sub> o G <sub>866</sub> o G <sub>867</sub> o G <sub>868</sub> o G <sub>869</sub> o G <sub>870</sub> o G <sub>871</sub> o G <sub>872</sub> o G <sub>873</sub> o G <sub>874</sub> o G <sub>875</sub> o G <sub>876</sub> o G <sub>877</sub> o G <sub>878</sub> o G <sub>879</sub> o G <sub>880</sub> o G <sub>881</sub> o G <sub>882</sub> o G <sub>883</sub> o G <sub>884</sub> o G <sub>885</sub> o G <sub>886</sub> o G <sub>887</sub> o G <sub>888</sub> o G <sub>889</sub> o G <sub>890</sub> o G <sub>891</sub> o G <sub>892</sub> o G <sub>893</sub> o G <sub>894</sub> o G <sub>895</sub> o G <sub>896</sub> o G <sub>897</sub> o G <sub>898</sub> o G <sub>899</sub> o G <sub>900</sub> o G <sub>901</sub> o G <sub>902</sub> o G <sub>903</sub> o G <sub>904</sub> o G <sub>905</sub> o G <sub>906</sub> o G <sub>907</sub> o G <sub>908</sub> o G <sub></sub>			



記号拡大

長頸壺に描かれた龍絵画  
(大阪府 池上曾根遺跡)

## No.59 龍の記号を付す土器

絵画がシンボル化した記号

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代後期

調査：唐古・鍵遺跡 第33次調査

発見年：1987年

大きさ：高さ28.8cm・口径13cm

展示位置：第1室「まつりといのり」

今回紹介する記号（文）土器は、龍の絵画が省略されたと考えられる記号です。長頸壺の頭部の表裏2ヶ所に針のような工具で描かれています。記号は、非常に細い線刻のため見えにくいですが、三日月形の下半部に矢が付き通ったように描かれています。

この形は、龍の絵画を知らないとなかなか理解できませんが、三日月形の下半分の形は龍の脚部を表現したもので、龍の頭部や胸部は省略され、脚部のみがシンボル化し、記号になったと考えられます。その象徴化された龍に三叉形（矢印の形）の記号が組み合っています。この三叉形の記号の意味はわかりませんが、大阪府池上曾根遺跡で出土した土器には、龍の絵画の左側に木葉状（三叉形が重複した形）の記号があることから、龍と三叉形はセットになることが読み取れ、地域を越えて広く共通した認識があったことがうかがえます。

ところで、龍は中国で作られた想像上の動物です。この動物絵画が、近畿地方の弥生時代後期の土器に描

かれているということは、既にその意匠を示す文物が当地にもたらされ、描き手は龍であることを理解していたことを示しています。唐古・鍵遺跡からも龍の絵画土器が出土しており、また、今回紹介したように龍をシンボル化した記号が存在することは、唐古・鍵ムラの土器作りの作者も龍の意匠を見て理解し、記号として消化していた可能性があります。このような龍を描いた絵画や記号の多くは、主に長頸壺に描かれ、井戸などに供獻されています。長頸壺は「水壺」的な役割がありますし、井戸に供獻する行為も「水」に対するものでありますから、中国にみられる龍の性格とも共通するといえるでしょう。

このように記号のなかには、龍を象徴化させ、記号に1つの意匠の意味をもたせるものも存在したようです。記号が重要な点は、国語的であることで、それら記号の存在するところ、それを認識できる記号体系と共に通の思考を有していたということです。



## No.60 大型臼と堅杵

豊作を喜ぶ風景がみえる臼と杵

弥生時代には、稻作の開始とともに鍬や鋤などのさまざまな農具類もいっしょに大陸から伝播しました。今回紹介する大型臼と堅杵も、実った穀物の脱穀や精白、製粉、餅つきなどに使われる重要な農具の1つです。銅鏡絵画に表現されている臼に向かい合う2人の女性が杵で脱穀している風景は有名です。

さて、唐古・鍵遺跡の大型臼は、直径50cm弱でトチノキの大木を輪切りにし、上部を深く彫りくぼめて臼にしたもので、臼の側面はくびれをもつように彫くえぐっています。特徴的なのは、そのくびれ部を持ち手になるようにブリッジ状に4ヶ所削り残し、装飾的にしていることです。難しい細工をしており、類例の少ない優品の1つといえるでしょう。

一方、臼とセットになる堅杵は、直径10cm弱の丸棒の中央部を握り部にし、両端を掲き部とするもので

### ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中～後期

調 査：大型臼 唐古・鍵遺跡 第69次調査

堅杵 唐古・鍵遺跡 第63次調査

発見年：大型臼 1999年

堅杵 1997年

大きさ：大型臼 直径47.3cm・高さ48.1cm

堅杵 長さ119.3cm・最大径8.9cm

展示位置：第2室「弥生の住まい」

す。杵にはこのような堅杵と、掲き部が柄に対して直角につく横杵の2種がありますが、弥生時代から中世にかけては前者が主流です。

唐古・鍵遺跡の堅杵は、弥生時代の堅杵の特徴である握り部の中央部に算盤玉状の凸帯を削りだしています。掲き部である両端は、平らでなく尖り気味になっています。この特徴は、セットとなる臼との関係で注目でき、大型臼の掲き部は平底ではなく、堅杵と対応するように丸底になっているのです。この両者の掲き部の形状から、これらは製粉でなく脱穀・餅挽き用の機能であったと考えられます。

穀物の脱穀は、調理するための第一段階の大変な作業であったと思われますが、銅鏡絵画にあったように2人の女性が向かい合い、そして豊作を喜び歌いながら脱穀していた風景が浮かんできそうです。

(1) 神戸市立博物館 1982年『国宝桜ヶ丘銅鏡・銅戈』



底部を打ち欠いた甕と壺

No.61  
土器を利用した  
集水施設

清水を得る弥生の知恵

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第19次調査

発見年：1984年

大きさ：壺 高さ50.5cm・胴部径36cm

甕 高さ48.5cm・口縁部径36.2cm

展示位置：第2室「弥生の住まい」

弥生時代になると稻作に伴う定住生活によって、集落景観がガラリとかわりました。ムラの周りには環濠がめぐらされ、その内部には竪穴住居や高床倉庫、井戸などが造されました。居住区が固定されることにより、清水の確保は生活の上で重要な要素となりました。これは、唐古・鍵遺跡で見つかっている多数の井戸からもわかります。

今回は清水を確保するための「集水施設」について紹介します。これは井戸と同じように清水を確保する点では同じなのですが、少し構造が異なります。この「集水施設」とは、土器の底部を打ち割り筒状にして砂層内に据えているものです。一般的には土器一個を据えています。

今回のものは、2つの上器を組み合わせており、下段に底部を打ち割った大壺を据え、その大壺の口縁部

に嵌まるようにこれも底部を打ち割った大甕をのせています。性格的には井戸枠と同じものです。

本来、井戸は地中深く掘削し下層の土中から染み出た清水を汲み上げます。唐古・鍵遺跡の井戸では2mちかく掘削しています。しかし、集水施設は、地表近くに表れている砂層から水を確保するもので、深さ50cm程度です。砂層に穴を掘るわけですから、直ぐに穴が埋まってしまうため今回のような土器を利用した枠を簡易に用意したと思われます。

このことは、井戸のように大地を積極的に掘削して清水を確保する弥生時代的発想でなく、自然の湧水を利用する縄文時代的発想が底流にあるかもしれません。それは唐古・鍵の人たちの「水」に対する二面性を示す遺構遺物として注目されます。



裏面

表面



細形銅矛の全体写真

No.62  
■ 鑿に転用された  
細形銅矛

近畿地方の初期青銅器文化を示す矛片

日本は、木の文化と言われますが、弥生時代になると石の道具だけでなく、金属器の登場でその鋏工は向上しました。鑿やヤリガンナなどがそれです。

今回は、近畿地方で最古級の金属器を紹介します。これは、鑿に転用された銅矛片です。長さ3cm・幅2cmほどの小片で、表面には銅矛にある極のくぼみの一部が、裏面には柄が挿入されるため中空になっている部分のくぼみが残っています。このような表裏の特徴から銅矛と推定することができるのです。また、極の特徴から、元の長さは30cmほどあったと推定され、銅矛の型式は最も古い細形銅矛の部類に入ると想定されます。銅矛は折損した後、長方形に形を整え先端を片刃として磨きあげました。

この銅矛片は、唐古・鍵遺跡の南地区にある細長い穴の中の腐食土層内から密閉された状態で出土しました。のことから弥生時代前半に特定できる良好な資料になります。近畿地方の青銅器は、単独で出土することが多くなかなか時期を決定することができない

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第33次調査

発見年：1988年

大きさ：長さ3.1cm・幅2.3cm・重さ7.0g

展示位置：第2室「木器をつくる」

中にあって時期を特定できる資料になるのです。この銅矛片が出土した前期末の時期には、朝鮮半島から多紐繩文鏡や細形銅矛が流入します。近畿地方では、大阪府柏原市大字寺前山遺跡や奈良県御所市名柄遺跡で多紐繩文鏡が見つかっており、唐古・鍵遺跡の銅矛片が朝鮮半島製かどうか注目されるところです。

また、この銅矛片がいつ、どこの集落で破損し鑿に転用されたのかも問題です。つまり、唐古・鍵遺跡に銅矛の形で流入したのか、鑿になってしまったものが流入したのかによって、その価値は大きく異なります。

唐古・鍵遺跡では中期の石矛と想定されるものも出土していることから、矛の形態は知っていたと思われます。その意味で今回の資料は、唐古・鍵遺跡を含め近畿地方に弥生時代前半段階に銅矛を含めた青銅器文化が存在したかを推定する貴重な資料となるのです。



さまざまな形態の銅鏃  
(唐古・鍵遺跡 第33次調査ほか)

No.63  
銅鏃 2種

伊勢湾岸地域の特徴をもつ有孔銅鏃

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代後期

調 査：唐古・鍵遺跡 第61次調査

発見年：1997年

大きさ：右 長さ2.6cm・残存幅1.0cm

重さ1.31g

左 残存長3.7cm・残存幅2.7cm

重さ2.88g

展示位置：第2室「弥生の住まい」

狩猟具・武器である弓矢は、縄文時代以降、大いに発達しました。矢の先端につける頭は、当初、石製や骨製でしたが、弥生時代になって金属器の登場により、青銅製や鉄製のものに置き換わりました。

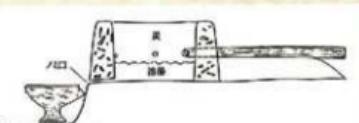
さて、今回紹介する鏃2点は、青銅製で唐古・鍵遺跡の青銅器鑄造の工房跡の南側で出土したもので、唐古・鍵遺跡では、これまでに大小24本の銅鏃が出土していますが、この工房跡近くでは、13本の銅鏃と青銅製の腕輪や有孔円盤なども出土しており、この地区で作られた青銅製品が散在している状況が読み取れます。

一般的に銅鏃は、平面が三角形でその底辺に茎の有るものと無いもの、また、鏃身が約3cmまでの小型の実用品とそれ以上の大型の儀器的な銅鏃に分類することができます。今回の銅鏃は、いずれも茎のあるものです。

写真右の銅鏃は、断面が変形の小型品で弥生時代によくみられるタイプです。これに対し、写真左の銅鏃は

数少ない大型品で身部の断面は扁平です。この銅鏃で注目されるのは、中央先端と両側辺に2mm弱の小孔を鋳造後に5つ開けていることです。このような孔を開けることで矢を射た時に音が鳴るとも言われていますが、実際はどのような役割であったのかはよくわかっていない。ただし、このような孔をもつ銅鏃は、伊勢湾岸地域を中心に分布し地域的な特徴のある銅鏃になります。このことは、唐古・鍵遺跡で作られた銅鏃が、伊勢湾岸地域へ供給されていたのか、その地域の影響を受け铸造したのか、今後の課題になります。

私たちが今見る銅鏃は、緑色に錆びた銅鏃ですが、弥生時代の人たちが見ていた銅鏃は、赤銅色の輝いた銅鏃であり、大型化することによって、実用品から威信財として古墳時代の銅鏃へと変化していったのでしょうか。



## 想定される溶解炉の見取り図

No. 64

### 弥生の鋳造技術を示す道具

今回紹介する送風管と取瓶は、青銅器を铸造する道具の1つです。唐古・鍵遺跡では、青銅の石製鋳型や土製鋳型の外枠などが多数出土しており、銅鐸を作るムラとして注目されていますが、その铸造技術に関わる重要な遺物になるのが今回の道具です。

送風管は竹による風を炉に送るための土製の管です。先端が「曲状」になるものと「直状」になるものがあります。曲状になるものが炉内に突っ込まれるので、曲状の先端が高熱により変色しています。この曲状送風管の後端には直状送風管が数本接続され、さらに輪郭本体に接続されることになります。弥生時代の輪郭の構造は不明ですが、他の民族例では、皮輪がありますから、同様なものが想定できそうです。

この曲状送風管の先端の被熱状況は、1~2cm前後で他の部分はほとんど被熱していないことから、この先端部分のみが高熱にさらされる状況であったことを

#### コレクション・データ

## 時代：弥生時代中～後期

圖：送風管（上）廣古·御遺跡 第40次調查

取類 (下) 廣古

取處 (1) 展白  
發回年：送服管 1990年

九九午·迎新書 1996年  
取讀 1996年

大者：送服管，復元長約50cm；管徑6.0mm

取扱 販売22

展示位置：第2章「青銅器をつくろ」

#### 展示位置：第2章 青銅器セクション

示しています。露天の炉であれば、送風管全体が被熱すると考えられることから、**カ壁**をもつ**焰解炉**のような構造で、その壁から送風管の先端だけが**カ内**にあつたことが想定できそうです。

一方、取瓶とは、熔けた青銅を鋳型に注ぐための器で、唐古・鍵遺跡では坏部の側面に注口をもつ高环形の土製品を想定しています。ただし、この高环形土製品は、この器内で青銅を熔かす「壇場」説もありますが、前述の送風管の状況から熔解炉を想定することで、この土製品は取瓶説に頼ります。

弥生時代の鋳型や青銅器は、近畿・北部九州を中心  
に多数出土しているにもかかわらず、それに関連す  
る道具類は案外少ないのが実情です。そのなかで、唐  
古・鍵遺跡の送煙管と取瓶は、弥生時代の青銅器铸造  
技術を解明できる重要な資料になっています。



実験に用いた鋳型と铸上がった銅鐸

No.65  
鋳放し銅鐸

弥生の铸造技術を実験考古学で検証

弥生時代の最も高度な技術に青銅器の铸造技術があります。専門的な技術集団によって構成されていたと思われますから、かれらを擁する集落はその地域の盟主的な位置にあったことでしょう。銅鐸鋳型などが出土している唐古・鍵遺跡もそのひとつです。唐古・鍵遺跡の铸造関連遺物は少なく、類例のないものですから、当時の技術を解明することは至難の業です。それを可能にするのは、実験による復元作業です。今回はそのような実験品を紹介します。

紹介する銅鐸は、その実験によって製作した「鋳放し銅鐸」です。この「鋳放し銅鐸」とは、鋳型に青銅を流しこみ、その鋳型から铸造された銅鐸を取り外した状態の製作直後のものです。したがって、銅鐸の縁辺には合わせた鋳型からはみ出した青銅（鋳ばり）が所々に残っていますし、仕上げの磨きをしていませんから、暗赤銅色の鉄肌をしています。さらに注目され

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第 3次調査

製作年：2004年

大きさ：高さ35.2cm・裾部幅21.7cm

展示位置：第2室「青銅器をつくる」

るのは、銅鐸の下端部（裾部）です。裾部は銅鐸の内側に巻き込むように青銅が固まっています。これは、铸造の際に銅鐸の鋸部分を下に、裾部を上にして、湯（熔銅）を流し込んだためで、裾部の状況は湯の最後の部分ということです。

これまで銅鐸の铸造は、巾木（中子）[中型]を固定するために中子の端を長くした部分)を用いる方法で復元していました。しかし、兵庫県辰馬考古資料館所蔵434号銅鐸<sup>(2)</sup>を参考にすれば、鋳型に巾木や湯口を設けない方法で铸造されていることがわかりますから、铸造実験では唐古・鍵遺跡の復元鋳型に直接、铸込む方法で製作しました。実験では見事に同じようなものが再現されました。

実験考古学でおこなった成果が、弥生時代の技術のすべてではありませんが、実験を通して再度、遺物を観察し、検証できることになるのです。



No.66  
木 錘

### 藁利用の始まり

弥生時代に始まった米作りは、お米の収穫とともに、その後に残された稻藁を素材として、さまざまな生活用品を作りました。俵や席、蓆、蓑、草鞋などの生活用品を始め、神社や正月に飾られる注連縄などの宗教的な品物に及び、近年まで重要な位置を占めました。

今回は、縄文時代から引き継がれた伝統的な「編む」技術を使い、新たな素材である稻藁を利用して俵・席などを「編む」道具を紹介します。編具は、編台の目盛板とそれを支える脚、縄糸の両端を結んだ2個一組の木錘の複数セットで構成されています。藁などの縄糸の上に、縄糸を付けた2個一組の木錘を前後に乗らし、これを交互に取り組んで縄糸を捩じり込むように編みます。これら道具の中で多く出土しているのが、今回紹介するような木錘です。直徑10cm前後の丸太を長さ15cmほどに切断し、その中央部に溝を



藁を編む風景の模型

### ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代後期  
調 査：上 唐古・鍵遺跡 第74次調査  
下 唐古・鍵遺跡 第90次調査  
発見年：上 1999年  
下 2002年  
大きさ：上 長さ17.5cm・直徑7.8cm  
下 長さ15.1cm・直徑9.4cm  
展示位置：第2室「藁を編む」

作っているものです。唐古・鍵遺跡では、木錘が12個セットで出土した例があり、絆糸が6本で作られた箆などが想定されそうです。

唐古・鍵遺跡では、弥生時代中期の長さ6cmほどの小型木錘も出土していますが、これは稀なもので、編具を作っていた可能性があります。むしろ木錘の大部分は、弥生時代後期以降に出現する15cm前後のものです。これは弥生時代後期ごろに穂刈りから根元から刈り取る「根刈り」へと移行したことに関係していると思われます。藁利用は、こうした「根刈り」が一般化することで可能になり、大型木錘が登場することになるのです。

唐古・鍵遺跡では、藁製品は出土していませんが、編具の変化から藁利用の始まりを推定することができるので、これ以降、藁は私たちにとって生活用品の重要な素材の一つになったのです。



布を織る風景の模型

No.67  
機織り具

弥生の布幅は30cm

## ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第13次調査

発見年：1982年

大きさ：綿打具（上） 残存長31.6cm

布巻具（下） 残存長54cm

展示位置：第2室「布を織る」

「衣・住・食」と言われるように、衣服は生活文化の中で重要な位置を占めています。考古資料としての衣服（布）の出土は稀ですが、製作に関わる機織りの道具はみつかっており、弥生時代の機織りについてもその技術を知ることができます。

機織りとは、2本の経糸を交互に上下させ、その間に1本の緯糸を通すことで、布を織る技術です。その原理は、世界各地で共通し、日本でも西陣織などに技術が受け継がれています。この「織る技術」は、弥生時代に大陸から導入されたもので、2本の経糸を一瞬にして交差させる画期的技術です。これに対し、縄文時代は「編む技術」で、カラムシなどの植物纖維を糸にし、「振り編み」と呼ばれる技法により編布という布が作られました。この技法は縫などを編む方法と同じです。

弥生時代の機織りは手機（原始機）で、唐古・鍵遺跡では、綿打具・布巻具と呼ばれる機織りの部品が出

上しています。

綿打具（写真上）は、緯糸の間に通した緯糸を手前にはめる道具です。左半分を欠損していますが、両手による作業に適した形態です。一方、布巻具（写真下）は、織りあがった布を巻きつける道具で、右端の把手は欠損しています。布を巻きつける部分の両端には、精緻な螺旋文様が刻まれています。このことから、この文様が施されていない中央部分が布幅になると推定され、これでは幅約32cmが布幅になりそうです。これまで他の遺跡で出土した布巻具もほぼ同じですから、弥生時代の布幅を想定することができます。

原始機での復元実験では、糸の紡績から機織りによる布の完成には數ヵ月が必要で、機織りを担った女性の負担は大きなものだったと思われます。しかし、月日をかけ丹精に織った布は、艶やかな衣服になったに違いありません。



古墳周濠からの出土状況

No.68  
笠形木製品

古墳を飾った木の埴輪

◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代後期

調査：黒田大塚古墳 第1次調査

発見年：1983年

大きさ：高さ15cm・底径46cm

展示位置：第3室「埴輪の世界」

古墳の墳丘には、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪などが飾られていたことはよく知られているところですが、このような土製の焼物の他に木製の飾り物も実は存在していました。今回は、そのような木製の樹物について紹介します。

今回紹介する木製品は、黒田大塚古墳の周濠から出土した「笠形木製品」と呼ばれるものです。コウヤマキ製で、車輪のような形をし、断面は低い台形を呈しています。上面は長期にわたって風雨に晒されていましたためか、風化によって溝状に深い筋がついています。

また、中央には貫通する一辺9cmの方形の穴が割りぬかれています。おそらくこの穴に柱を刺して墳丘に並べたのでしょうか。黒田大塚古墳の笠形木製品は直径46cmの大型品ですが、筆鉢山2号墳のものは直径30cmほどの小型品で、古墳の規模に応じて木製品も作られたようです。

古墳にこのような木製品が立て並べられていたことが分かってきたのは、20年ほど前からで、橿原市四条古墳の発掘調査では墳丘が削平され周濠のみとなつた濠からさまざまな木製品が多量に出土しました。これら木製品は、葬送の儀礼に使用されたものと古墳の周囲に立て並べたものとに分けることができるようになりました。

古墳に樹立した木製品は、そのままの状態ですと腐って残らないのですが、墳丘が早く崩壊し周濠内に転落することによって水分のある粘土層で埋没したおかげで残ることになったのです。

私たちは、腐らずに残っている石製や土製の遺物を中心に推定しがちですが、保存環境や何かの偶発的な出来事で幸運にも残る遺物（木製品）によって、築造当初の古墳を再現することが可能になるのです。

## Magemono

Bent Wood Box with Family Crest



内面のケビキ部分

No.69

## 家紋のある曲物

現代に生きる曲物技術

今回紹介する資料は、曲物と呼ばれる容器で、檜などの薄板（ヘギ板）を円筒状に曲げて、桺皮紐で縫じ合わせた製品です。現在では、和風の「曲げわっぱ弁当箱」など人気のある商品としてその技術は残っています。この曲物技術は、古代から中世にかけて盛行し、麻筒・楳物・箱物とも呼ばれ、かつては木製容器のなかで、主役にちかいものでした。

さて、紹介する資料は、檜と思われる厚さ3~4mmのヘギ板を曲げて、重ね合った部分を縫2列にわたって桺皮紐で縫じたものです。ヘギ板を曲げるために、刀子状の工具によって、内面に縦方向の傷（ケビキ）を入れる例が多くあります。今回の資料では、縫じ合わせ部分に3条の縦線がみられます。

この曲物では、下端から約1.5cmの高さに2mm程度の小さな孔がほぼ等間隔であけられていることから、本来は底板があり、それを木釘で固定していたと考えられます。

## ◆コレクション・データ◆

時代：江戸時代

調査：平野氏陣屋跡 第3次調査

発見年：1992年

大きさ：直径18.8cm・高さ9.1cm

展示位置：第3室「田原本のあゆみ」

この曲物の側面には、円形の中に2重の菱形を描いた家紋あるいは屋号と思われる墨書きがあります。また、この墨書きの反対側には、上から2cmのところに6mmのやや大きめの孔が1つあけられていますが、この用途はわかりません。

江戸時代の曲物には、墨書きにより納豆・梅干・塩辛などの食品名が書かれた蓋がみられることから保存・発酵食品用の容器、また、運搬にも便利なことから駄菓子・酒類などの販売品としても使われたようです。

今回の曲物は、陣屋の一部である家臣団を区画する大溝から出土したことから、その人たちの所有物であったと思われますが、その用途は特定できません。

室町時代（1471年）の『大乗院寺社雜事記』には、この田原本に「檜物座」があったことが記されており、曲物を中心とする流通が盛んであったことがうかがえます。今回の資料は時代的に後のものですが、かつての栄華を思い起こさせる一品かもしれません。



瓦製建物の屋根部分  
(平野氏陣屋跡 第3次調査)

## No.70 江戸時代の箱庭セット

豊かさを示す遊び道具

今回は、江戸時代に作られたミニチュアの土製品を紹介します。いずれも瓦と同様の技術による焼物で、天守閣と土塀を表現しています。

天守閣は、上端部が欠損していますが、3層以上の建物と考えられます。内側は中空で、粘土紐を積み上げて成形されています。補強のために貼り付けた粘土のあとが残るなど、作り方は粗雑ですが、外面には破風やシャチホコが表現され、天守閣の建築様式が写実的に表現されています。

一方、土塀も太い粘土紐を積み上げて、塀と屋根を作っています。射撃用の三角の窓がみられることから、天守閣に付属する城郭の一部と考えられます。屋根の表現は内側(写真に写っている面)に比べると、外側が簡略化されていることから、内側を正面に置いて使ったと考えられます。

ところで、このようなミニチュアの土製品には、建物のほかに橋・灯籠・塔・船・人物などさまざまな種

### ◆コレクション・データ◆

時代：江戸時代

調査：平野氏陣屋跡 第3次調査

発見年：1992年

大きさ：天守閣 幅12.4cm・残存高11.2cm

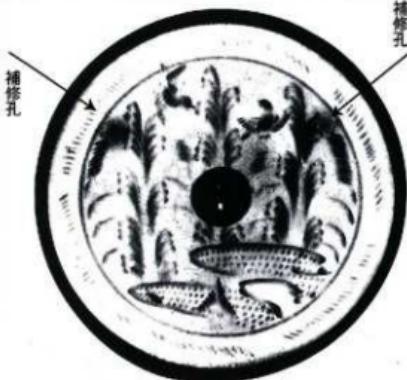
展示位置：第3室「田原本のあゆみ」

類があります。このようなミニチュア品は、小箱や盤の上に配し、模擬的な風景を楽しんだ箱庭道具と考えられています。

箱庭は、平安時代の貴族たちが、箱や台に砂を敷き、石・草花を配した「洲浜」に由来するとされています。また鎌倉時代には、孟蘭盆に人形や山水・草木といった「細工物」を並べる風習が民間でもみられ、江戸時代前期には「鉢山」と呼ばれたようです。

それまでは孟蘭盆など信仰との関連が強い箱庭道具でしたが、江戸時代後期には町人を中心に行び道具として普及・発達しました。まさに現在のプラモデルの原型で、男の子用の玩具かもしれません。

江戸時代後期には、箱庭道具のほかにも独楽・面子・ままごと道具など子ども用の遊び道具も確立しており、その背景には武士や町人の豊かな生活が垣間みられます。



鋲かけされた孔（矢印部分・X線写真）

No. 71

## 和鏡

寺社の奉納品？

現在、私たちが使用する鏡の多くは、明治時代に普及した「ガラス鏡」ですが、それ以前は青銅製の鋳造された鏡が使われていました。今回は、そのような室町時代の「和鏡」を紹介します。

鏡は顔を映す方が表面ですが、博物館では鏡の裏面、すなわち、文様のある面を見るように展示しています。これは、この裏面に鋲出された文様や絵画が特徴的で、時代によって異なり、その図柄自体に何らかの意味をもたせていることが多いからです。

さて、今回の和鏡の裏面には、鳥・植物・砂浜の文様が鋲出されており、「州浜双草双雀文鏡」と呼ばれています。いずれの図柄も古墳時代にみられる神仙世界の神獣のような図柄ではなく、和風化したものです。中央部には、紐を通すための突出した梢円形の鉤が作られています。

ここで、少し日本の鏡の歴史をさかのぼりましょう。日本には、弥生時代に朝鮮半島・中国から初めて

## ◆コレクション・データ◆

時代：室町時代

調査：十六面・薬王寺遺跡 第15次調査

発見年：1998年

大きさ：面径9.8cm・厚さ0.5cm

展示位置：エントランス「小窓ケース3」

鏡がもたらされ、古墳時代を通じてこの時代の鏡は「權威の象徴」を示すすごく一部の人たちのものでした。その後、平安時代後期にはシンプルなデザインの「和鏡」が誕生し、江戸時代には化粧道具として一般の人たちにも広がりました。

このような「和鏡」は、化粧道具としてだけでなく、自らの姿を映した鏡に病氣治癒などさまざまな願いを込め、寺社に奉納しました。

今回の「和鏡」をX線で透過させると、直径3mmほどの孔の痕跡が2ヶ所みつかりました。

のことから、この鏡は、本来、どこかの寺社に奉納され、柱や壁に打ち付けられていた可能性が出てきました。それをそのような経緯で、この十六面・薬王寺遺跡の人が人手し、使い、投棄したかは謎です。

このように、鏡は単なる化粧道具ではなく、鏡に神秘的な力を求める人々の願いを、この鏡を通して映し出すことができそうです。



本書掲載の唐古・鐵遺跡出土品

唐古・鐵考古学ミュージアム  
ミュージアムコレクション Vol.3

発行：田原本町教育委員会  
〒636-0336 奈良県磯城郡田原本町925-1

編集：唐古・鐵考古学ミュージアム  
〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町坂手233-1

発行日：2010年3月30日



本書掲載の田原本町内遺跡出土品